★特集は、「ああ、きょうだい」(17ページ～)

過去最少を記録した 2019 年の出生数(86 万 5234 人)よりも、2020 年の出生数は減少すると予想され、コロナ禍の影響もあり、来年は 80 万人を割ると言われています。解雇・雇止め人数は、今年 9 月に 6 万人を超えました。その多くが非正規で女性です。大企業の早期退職者募集のニュースが毎日のように報じられています。貧困・格差社会が進むなかで、第二子の出産を望まないという方が増えるのを危惧します。しかし、今月の特集で、弟や妹の誕生を前にしての「予習」となり、きょうだいを育てている先輩保護者は、大変なこともあるけど、今まで以上に子育てが楽しくなってほしいと思います。そのために、保育園や幼稚園などでの親同士のつながり、親と保育者とのつながり、園の子育て支援・家族支援について考える機会になればと思います。

ちなみに『ちいさいなかま』のバックナンバーをひも解くと、2016 年 6 月号(№.635)では、「どうしたらいいの？赤ちゃん返り」が特集されています。同誌 26 頁に「『関わりあう』保育園の持つ力！」、29 頁に「保護者の学びと子育ての共感を大切に」、32 頁に「保育園だからできること」をキーワードに実践が紹介されています。同誌小論は、今月号 78 頁からの「2 歳児の発達と保育」(連載⑨)の小川絢子さん(名古屋短期大学)が書かれ、「『赤ちゃん返り』は成長の過程で起こる自然な姿」と論じられています。

◎手記：●(18ページ～)兵庫の**なおたか**さんは「(きょうだいが)たくさん衝突して、泣いて、怒って、考えて、そのつど、最善を探していくしかないんだな～という悟りを啓きたいのですが、まだまだ修行は続きそうです」と。●(22ページ～)愛知の**ライオンとゾウ**さんは、九歳の男子に、四歳の双子の男子の五人家族。保育園で「双子の会」があり、「本当に、わかりあえるメンバーがいるって、どれだけ救われたか。集まるだけで、ホッとする会。私の心の支えです」と。●(26ページ～)群馬の**木崎**さんは「子どもの特性を知るというのは、(中略)子どもの成長を感じることと同じくらい、もしかしたらそれ以上の、無限の喜びやうれしさを感じられるような気がしてきます」、「子育てはわが子という船に乗せてもらってどこへ向かうか(導かれるのか)わからない旅のようなもの。行き先は子どもの数×無限大、兄弟姉妹千差万別。そう思うと、改めて親になった喜びをかみしめてしまいます」と。**➡30ページからのエピソード＆アドバイスは、共感と納得感満載。**

◎小論(35ページ～)：**松田千都**さん(京都文教短期大学)ご自身の子育て奮闘記をまじえて、「きょうだいができること」を 2～3 歳児の発達の特性から分析し、「平等」と「公平」のイメージを図解して、「子どもが言葉や態度で表す要求は、心の中で子どもが本当に求めているものとは違うことがあり、表面的な要求にいくら応じても子どもの心は満たされないという場合もある」と、子どもが「ちょっとが

まん」するなかで親子関係が深まっていくことを論じ、「子どもたちが時間をかけて『きょうだいになっていく』のと並行して、親も時間をかけて『きょうだいの親になっていく』」、「そのプロセスが家族にとって大事な時間になるように、みんなで支えあっていきたいと思います」と。

★今月の子育て日記も姉弟きょうだい「同じ親から生まれても」（54ページ～）
東京の<u>たまねぎ</u>さんは六歳の娘と三歳の息子と私の三人暮らし。「娘にとって保育園はまさに『仕事場』なのかもしれません。『こんなに保育園で神経を使っていたら、家ではスイッチオフ（甘えん坊）になるよね』と納得。「同じ親から生まれても、それぞれに違う個性を持つ子どもたち」、「いくつになっても私たちは自分の気持ちを誰かに受けとめてもらいたい」と。

★おばちゃん、保育園で遊ぶ（連載⑨）（62ページ～）：公立保育園の保育補助の冨樫さんは「十二人いれば十二通りのスタートがある。おばちゃんたちは、子どもが気持ちよく保育園の生活に入っていけるよう、見守り寄り添う。が、わずか三歳の子どもが時折見せてくれるやさしい気持ちに、その何十倍も癒されている」と。

★沖縄の子ども食堂から（連載⑨）（52ページ～）：菅原さんは「私は子どもたちの大ファン」、「子どもたちそれぞれのペースで歩み、その進み方も含めて、それはその子たちが持っているそれだけで素晴らしいもの。勝っても負けても、できてもできなくても、その歩みを見守ることが嬉しい大ファンなんだ」と。

★保育、こんなときどうする？どう考える？（連載㉝）**「評価を気にする子どもたち」**（86ページ～）：清水玲子さんは「おとなの評価をとても気にしている子の姿がたくさん見られる」、「おとなの評価的な投げかけに子どもは一生懸命応えようとしている」、「その人の存在そのものが尊重される体験こそが大切で、比較したり〇×の評価をしたりすることはやめなくてはなりません。評価を気にする子どもたちを生みだしているのは評価を気にするおとなたちなのだと思い知らされます」、「それぞれの子の生きていくかけがえのない時間を、安心や発見や共感の喜びに満ちたものにしていくために何ができるのか、自分の園の子どもたちからヒントを引き出してみませんか」と。

➡特集と合わせて連載を読んでいくと、おとなたちが、子どもたち一人ひとりを尊重するということから、大人自身も自尊感情をたかめながら育っていくのではと思いました。是非熟読して、具体的な事例の意味を考え、そして、『ちいさいなかま』を読むおおきななかまたちとご自分の経験も交えて話し合われたらと思います。